

---

# 真選組にて咲く花は

天野 キラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真選組にて咲く花は

### 【Zコード】

Z9002Y

### 【作者名】

天野 キラ

### 【あらすじ】

記憶喪失のところを、近藤さん、つまりは真選組に拾われ  
だからだで副隊長を任せされることになった女隊士のお話。

真選組のメンバーはもちろん、天パやチャイナ娘にメガネ、何故だ  
か敵側のはずの長髪や、え……あの派手な着物の男や三つ網の兄ち  
ゃんもアリストと関わりが……？

某サイトで執筆していたものを「コピーしてきたものなので、もしかしたら見たことがあるという人がいるかもしれません。作者の名前は違いますが、某サイトと同じ人です。

わたくしアリスは、晴れて一番隊副隊長になることができました。

ここに真選組のみなさんは、記憶のない私を預かってくれ、最初は女中にさせるだの言つてたのですがなんだかんだで隊士になります。……まあ、ここに真選組屯所には、総悟に無理やり連れてこられたようなものなんだけど。

最近、隊士として一生懸命頑張つてた私の努力が認められてか、先日、私は真選組一番隊副隊長になることができ、就任式が開かれました。なんだか照れくさかつたけど、私が今までよりも真選組隊士として認められたような気がして、嬉しかった。

初めて会つた松平のとつあんも、最初は怖い人だと思つていたけど、良い人そうで安心した。

これからも、真選組の隊員として、一番隊副隊長として、頑張るぞ！

就任式が終わつた後、近藤さんが、今夜はアリスちゃんを祝つて宴会だの言い出した。

みんなが見事に酔いつぶれてきた中、総悟の隣に座つていた私に土

方さんが近づいてきて、口を開いてきた。

「よかつたじゃねーか、副隊長になれて」

初めて直接的に聞いた土方さんの祝いの言葉が、私は素直に嬉しかった。

「ありがとウイザード、土方さん」

私はなんだか照れくさくて、えへへ、と笑いながら返事をする。

「だがな、月宮。副隊長になつたからには、今までよりもきつくなるぞ。女だからって甘やかしたりはしねえ、ビシビシいくから覚悟しちけよ?」

私はこくつと頷いた。

「なあアリス、土方さんに潰されねえよつこ、気をつけろや。この人Sだから……」

いや、むしろSはあなただからー総悟だからー

「人聞きの悪いこと言つてんじゃねえ！……まあいい、とりあえず今は、飲め。お前の祝いだ」

今までお酒に口をつけていなかつた土方さんが飲み始め、私と総悟もお酒を飲むことにした。

……といつか私の場合は、総悟に無理やり飲ませた。

お酒を飲んで、顔が火照ってきたのが自分でもわかる。

「総悟、もう飲めない……」

と訴えてみるも、無意味だつたようだ。

「え？ 飲み足りないって？ しづがないやつでしょア」

そう言つて総悟はお酒の入つたコップを私の口におしつけてくる。

「んつんーつー！」

ちつがーうと言いたくても、コップをおしつけられてるのでうまく喋れない。そして私は仕方なくお酒を飲む。

田線を土方さんに向け、助けを求めるよつとしたが、そんな私の様子を見て土方さんは笑っていた。

2人とも、ひどい……

先ほど総悟が、土方さんに潰されないよう気に気をつけろだとか言ってたけど、今まさに、あなたに潰されています……

総悟がやけに生き生きしているし、土方さんも珍しく笑っているし、たまにはいいかな、なんて開き直つて私は飲み続けることにした。

「真選組一番隊副隊長になつたからには、今までよつもずっと俺の側にいなせよ。これは隊長命令でさ！」

なんて総悟が言つてきたけど、赤い顔してたもんだから、酔つた勢いで出てきた言葉だと思い、適当にスルーしておいた。

そして、いつの間にか私の意識はなくなつていた。

田を覚ますと、すでに朝がきていた。

近藤さんも土方さんも総悟も山崎も、真選組のみんながどことなく幸せそうな顔で眠っている。

私はそんな光景を見てクスリと笑い、とりあえず部屋に戻ることにした。

ついに副隊長になった私に、土方さんに今までよりも厳しくなるだとか言われたけれど、副隊長になってからの私の初めての仕事というのには

「おい、俺のマヨネーズとタバコ買つてこい」

「缶ジュース買つてきなせよ、炭酸のな」

……要するに、パシリだった。  
しかも総悟まで。

こんなの、ミントンの人によりせねばいいのよ、と思いつつ、渋々ながらも買いに行く私は偉いと思つ。

店に入り無事に2つの品を買い終え、後はタバコのみとなり、私はタバコの自販機の前で立ち渴んでいた。

「ナニいえば、銘柄聞いてないや……」

私はタバコのことはよくわからなく、適当に自分が気に入ったタバコのボタンを押した。

そして私は今、土方さんにマヨネーズとタバコを渡している。

「おこ北条……マヨはいいが、これは何だ」

「何って、タバコですよ?」

「こんな文物のタバコ、吸えるかああー!」

私が土方さんに渡したタバコの箱は、ピンク色でバラとハートのデザインが入っている、とても可愛らしいもの。

可愛いものは田がないんですねー、と言つてみるもの

「おめーが吸うわけじゃねえだろー。」

といつ突込みが返ってくる。

こんなの吸えるか、と言つてたわりには、ピンクのタバコの箱からタバコを取り出し、マヨライターで火をつけ、早速タバコを吸つている。

ま、味は悪かねえか。なんて呴いている。なんだかんだで私の買ったタバコを吸う土方さんは、優しいな。なんて思つてしまつ。

それにして、土方さんがピンクの箱を持っているのって、なんだか似合わない。

それを口に出して笑いながら言つと、おめーが買つてきたんだろが！と殴られた。

いつたあ、せつかく買つてきたのに。まあいいや。次は総悟に渡しに行こう。

そして私は総悟の元へと向かつた。

「……何ですかイ、これは。俺は、炭酸を買つてここと言つたんで  
すがねイ」

「買つてきただじやん、ほらー。」

そう言つて私は総悟に手渡さうとするが、総悟は受け取らうとした  
い。

「俺が言つたのは缶ジューースの炭酸でさ、これは乾電池の単二じ  
やねーか」

「やうなの?でもまあ、似たようなものじやん

「だいたい、乾電池なんて何に使うと思つたんディ。ていつか、お  
めーわざとだろイ」

「何か、充電したいものもあるのかなー、つて」

「おめーの頭でも充電してやる！」

総悟はよくわからぬことを言い放ち、もじわざとじやなこと言つなら、こいつはよっぽどの天然でさア。と咳き、総悟は立ち去つてしまつた。

ま、そんなとこも可愛いんですがねイ。

最後の咳きがアリスの耳に届くことはなかつた。

無事におつかいを終えると、なんだか小腹がすいてきた。

「お腹すいたなー」

なんてつっこ口に出てしまつた。ふと、縁側に座り込む。

「今、真選組ソーセージ持つてるんだけど、よかつたら食べね?」

そうやつて声をかけてくれたのは山崎。近くに元氣がつかなかつた。

私はありがたく真選組ソーセージをもらひ。山崎も私と一緒に、横に並んで食べだした。

「おいしー。これって、何の肉なんだろう。魚肉かな？」

「真選組ソーセージはね、魚肉60%と、何かの肉40%でできてるんだよ」

「何かの肉って何いい！？」

私の何気ない疑問に山崎が答えてくれたが、何かの肉がとても気になつた。すると、いつの間にか総悟も近くにいて

「何かの肉つたら、決まつてるじゃねーかイ。あの肉だよあの肉……」

なんて言い出す。

なんだか総悟が言つと、怪しい肉に聞こえてくる……

俺にもソーセージくれやイ、と総悟が山崎に言い出し、総悟が私の隣に座り、3人並んで真選組ソーセージを食べた。

けつきょく、今日は副隊長らしいことは何もしなかったけど、こいつ日もなんだかいな、と私は山崎と総悟に挟まれながら空を見上げ、そう思った。

朝田が覚めて、こつものよつこや度をする。

「それにしても、なんだか寂しい部屋だなあ」

自分の部屋を改めて見て、いつ思つ。殺風景といつか、なんといつか。いつ可愛らじこものでも置きたいな。

「お花とか、飾りたいな~」

そういえば、万事屋の近くにお花屋さんがあると聞いたことがある。よし、お花でも買いに行こう!私は早速外に出て、花屋へ向けて歩みを進めた。

とこくわけで、私は万事屋の前に辿り着いた。

確か、花屋はヘドロの森つて名前だつて聞いたんだけど、見当たらぬ。銀さんなら知つてゐるかな? そう思い万事屋に入ひつとすると、青い顔をした銀さんが中から出でてきた。

「銀ちゃん！」

私は上にいる銀さんに、顔を見上げながら声をかける。  
私に気づいた銀さんは、私を見た途端に顔色がよくなり、こわい元に向かって歩いてきた。

「おひ、アリスちゃん。それ……！」

銀さんは私の頭を指差している。

「ああ、これですか？」

銀さんが指差した私の頭のそれは、お花の髪飾り。花びらが大きくて、丁寧に作られている。以前、万事屋にお世話になつたときに、銀さんが私に似合うものを選んで買つてくれたものである。本当は私がお礼をしなくてはいけない立場だったんだけど、でもこのプレゼントは素直に嬉しかった。髪飾りを身につけているところを銀さんに見せたくてつけてきたのだけれど、こうして見せることができてよかつたなあと思う。

「つけてくれてんだな、やっぱ似合つてる

そう言って微笑む銀さん。初めて男の人にもらつたプレゼントです

から、大切なでいつもつけてます。と微笑み返すと、銀さんの顔は少し赤くなつた。

あ、そういうお花といえば……

「銀さん、ヘドロの森つて店の場所、わかりますか？私、お花が買いたいんです。」

私がこう質問をすると、赤みがかったいた銀さんの顔は再び青くなりだした。顔色がコロコロ変わる、忙しい人だなあ。

「い、いやあ。あそこには行かない方がいいと思うよ？銀さんは今から行かなきゃいけないんだけど……回覧板が、そのヘドロ様のここに回さなきゃいけねえんだよ。こんな時に限つて新ハモ神楽もいやがらねえしよー……」

冷や汗混じりにそう喋る銀さん。

よく見ると、銀さんが手に持つているそれには、回覧板とかかれている。

「そ、そうだ。一緒に回覧板届けに行かない？むしろアリスちゃんこれ代わりに届けてくんない？」

行かない方がいいと言っていたのに、代わりに届けておいてしまった  
ということだ。

「回覧板ぐらい、一人で届けてくださいよ~」

そう言って、私は銀さんの前から離れようとする。

「確かアリスちゃんさ~ヘドロの森の場所知りたいんだろう? ほれ、  
というわけで、俺についてきなさい! 頼むから!」

というわけで、なぜだか銀さんとヘドロの森へと向かうことになつた。

ヘドロの森は万事屋のすぐ近くにあった。

「ひつ」

私は思わず声をあげた。

緑色で鬼のようにおつかない顔をした人物……天人が、店の前にいたから。

ライオンのようなたてがみが高等部から首の周りを覆い、  
側頭部からは水牛のように湾曲した角が一対生えている。

そんな人物がお花に水やりをしているのだけれど……とにかく怖い。

銀さんの方を見ると、若干震えている。  
どうやらあれがヘドロをさりじ。

銀さんは、やつぱ無理イイイと言しながら私に回覧板を押し付けてくる。

私は渋々回覧板を受け取り、まあ、渡すだけならいいかな……と考える。  
どうやら銀さんの話になると、一応彼は優しい性格をしてくるのだとか。

……じゃあなんで、そんなに怖がってるの？

あ、あの顔だからか……

とりあえず、私は回覧板を持ち、ヘドロさんの元へと戻る戻る向かつた。

銀さんは店の看板に隠れて、私の様子を伺っていた。

情けない、男らしくない、と言つと、心に突き刺されたのか、顔を下げてしまふぼつとしてしまつた。

なんで、お花を買いにきただけなのに、こんなミッションをこなさなくてはいけないのだろうか。

外見で中身を判断しちゃいけないんだよ、この人優しいんでしょ？  
大丈夫でしょ？

なんて心中で何度も思いながらヘドロさんへ接近する。  
そして私はヘドロさんの前に辿り着いた。背の高いヘドロさんを見  
上げながら私は言つ。

「あ、あああの、初めましてヘドロさん。回覧板をー……」

私は最後まで喋ることができなかつた。

……ヘドロさんは突然、私のことを吹つ飛ばしたのだ。

一瞬、何が起つたのかわからなかつた。

いつの間にか地面に横たわつている自分自身にびっくりする。  
例えるのなら、思考回路はショート寸前状態。

「今のお嬢さん、もう少しで蟻を踏み潰すところでしたよ。いやあ、  
殺生はいけない

私の方を見て、田を赤く光らせたヘドロさん。もう私の寿命、縮ま  
つたかもしれない。

あなたの足がもし蟻さんを踏んでしまつたら、どう落し前つけてくれるの？と、どこかで聞いたことのあるピンク髪の姉さんの歌の台詞が聞こえてきそうな瞳で訴えてきてこのよつな気がする。

すると、銀さんがビビつながら隠れていた場所から出ってきた。

「す、すみません。僕たけい、回覧板届けにきただけなんですよーそれで僕見てたんですけど、女の子を吹っ飛ばすのどうかなー、なんて思つて、あは、あはは」

銀さんは、私の落とした回覧板を拾い、恐る恐るヘドロさんに手渡していた。するとヘドロさんは

「おやおや、回覧板でしたか。しかし、彼女に痛みを『えるつもつはなかつたんですが」

「痛みを『えるつもつはなかつた？」

一撃で仕留めるつもりだったああ！？

銀さんの中でもう思つた。

アリスちゃんが立ち上がり、俺の方へと近寄ってきた。

「しかし、最近見かけませんでしたね。この頃お顔を見ていないかつたので、何かあったのかと心配していましたんですよ」

「やばい！何かをしようとしている！」

「あちらのお嬢さんにも悪いことをしましたね。せっかくだからお一人とも上がつていきませんか？何か」駆走でもしますよ

「やばい！俺たちを！」駆走になるつもりだ！！

「大変ありがたいんですが、僕たち忙しいのでこれにて失礼します！」「

「そうして俺はアリスちゃんの手を握り、一目散にその場から走り去つた。

回覧板は渡せたし、ミッションコンプリートだ。文句ねえだろ。

「こやこやこや、又句あるから、銀さんあなたへタレすさがだから  
ー。」

「ここんだよ、銀さんほこぞとこひ母にキリめくんだからー

全速力で走って、今はやつと、2人して膝に手をつけ、ぜえぜえ言いながら休んでこる。

呼吸もだいぶ落ち着いてきた頃に

「かわいい、お花買えなかつたなー」

なんて、口に出る。

「じゃあもつかい戻るか?」

「いや、それはいいです

「つーか、花ひてよー、別に買ったのじゃなくてもーだり?」

銀さんがもう口に出したが、それってどうこう意味だり。

ほれ、と銀さんの指差す先を見て見れば、そこにはお花が、  
ムラサキシコクサが咲きほほっていました。

「わあ……！」

思わず私は感嘆の声をあげる。紫の他に、所々白色やピンク色があつて綺麗。

思っていた花とは少し違つけど、  
小さい庭の花だって生けられると聞くし、私はこの花たちを少しだけ持ち帰ることにした。

帰つたら綺麗に生けよう。

上機嫌で鼻歌を歌いながら花を摘む私を見て、銀さんは優しげに微笑んでいた。

その後、銀さんは屯所前まで私を送ってくれた。

そして私は早速、摘んできた花を生けて飾つた。部屋にワンポイントができて満足なのだが、花が少しあまつてしまつた。

「ちょっと欲張つちやつたかなあ

余った花を見て、うーんと頭を悩ませる。

これ以上生けたら、ちょっとじやがちやがちやした感じになっちゃうよ  
なあ……

……そうだーあの人の部屋にも、飾つてしよう。

私はムラサキツユクサを手に持ち、その人の部屋へと向かった。

「肘方さーん！ いますか～？」

「おう、円富か。つつーか字が違えだろー。」

私は土方さんの部屋の襖を開け、中に入った。

すると、土方さんは書類に目を通し、忙しそうに作業をしていた。  
私服だから、今日は休みのはずなのに。

休みの日にも仕事をするなんて、流石だな、と尊敬する。あまりにも忙しそうだったから、手伝いますか？と聞いてみたけれど、別にいい、それよりお前は何をしにきたんだ。と返された。

お花を生けにきたんですー」と元氣よく言つてみれば、土方さんは顔をしかめる。

私は花を生ける作業をしながら、迷惑でしたか?と聞いてみる。

まー、悪かねえな。

と返事がきたから、私は土方さんの部屋に花を飾つた。自分の部屋のよりも、綺麗にムラサキツコクサを生けることができた。

「ハハハの、こいものでしょ、ひ?」

ヒーヒヒと笑つて土方さんに話しかけてみる。

すると土方さんは、突然私に近づいてきたかと思えば、床においてある生け忘れた花を手に取り出した。

何をするのかと思いきや、無言で私の頭にそつと花を添えた。

「今つけてる花の髪飾りも悪かないが、これも似合つ

なんて無表情で言つてくれる。なんだか、なんとなく土方さんらしくない感じがして、声に出してくすくすと口に手を当てて笑つたら、耳まで真っ赤にしてそっぽを向いてしまつた。

「花は、お好きですか？」

「正直、好きじゃねーな」

予想外の返答に私は思わず目を丸くする。せりあせ、悪くないだとか、言つていたのに。

「花は、いつかは枯れちまうだろ。ずっと綺麗に咲いてはくれないだろ」

どこか寂しそうに土方さんは咳き始めた。

その寂しげな横顔は、まるで誰かを思い出しそうな、そんな表情をしていて。

そんな切ないような苦しいような顔をして、いつたい、誰のことを思い浮かべているの……？土方さんのそんな表情を見ていると、こちらまで胸が締め付けられるような気持ちになつてくる。

でもその表情はすぐに変わり、こちらを振り向きながら

「安心しろ。お前の生けた花は嫌いじゃねーから

と言つてくる。でもその振り向かれた顔はどこか作ったような表情なわけで。

私はその顔を見て複雑な心境になる。

「おい、信じてねーのか、ほんとだぞ」

そつ言つてくる土方さんの顔は、いつもの表情に戻つていたので、私は安心した顔を見せる。

その安心した顔を、私が生けた花は嫌いじゃない、と言われたことからきたのだと勘違いしたのであるう土方は、ふつと笑い出した。

でもやつぱり、少しだけ見た土方さんの切なげな表情が、頭に焼き付いて、離れなくて。

誰のことを思い浮かべていたんですか？なんて野暮なことも聞く気にはなれない。

そもそも、誰かを思い浮かべていたなんて、私の思い違いかもしないけれど。

「お仕事の邪魔、してしまいましたね。そろそろ、失礼します」

せつして私は逃げるよひに土方さんの部屋を後にした。

アリスの出でた方を土方はしばりくせーと見つめていて、でも  
すぐに作業へと手を戻した。

ムラサキツコクサの花言葉は

尊敬

ひとときの幸せ

アリスが花言葉の意味を知つてか知らずかはわからないが、土方さんには、幸せを感じてほしい。と願うアリス。

土方は、アリスの生けていつた花をどこか優しげな表情で見つめ、  
それからゆつくりと、タバコに手をのばし、一服した。

### 3 (桂に連れられた先は…メイド喫茶?)

「おせんじーるわこまーすー。」

「それ違う隊士達に、私は元気よく挨拶をやる。」

「あ、おせんじーるわこまー、『ココロセス』

「え、ひな、アリストクラス?『ココロセス』向こうー?」

「こやあ、一番隊副隊長になつたからには、今までよつも士気を高めよつと思こまつて」

「その結果が『ココロセス』で浮び方なのー?」

「わかつましたよ、じゅお『ココロセス』

「ハ とれまここつてもんじやなこのーー。黙怒ぬよー。」

「ココロセスとそんな会話をしつこいと、前から土方さんがあつてき

た。

「土方さん…おはよ、ハルゼー…」

「ハルゼーさんだよ、騒々しい。つたぐ、朝からでかい声張り上げてんじやねーよ」

「あう、すみません……でも、せつかく副隊長になつたといつのこと、これといった仕事ないんですよ。今日だつて私非番だし……」

「それと、だけえ声と関係ねーだるが」

不機嫌そつな土方さんの返答に、私は思わず頬をふくらます。すると、そこに総悟がスピーカー片手にやってきた。

「おひさまよハルゼーこまあーす…」

いつものやる気のない声からは想像もつかないくらいの元気な声で、土方さんの耳元で思いつきり叫んでいる。

「総悟、てめえっ。耳元ででかい声で叫ぶんじやねーって今言ったばかりだらが！それになんだそのスピーカーは…」

「あ、そうだったんですかイ?すいやせーん」

「なんだその棒読みはー。」

そんな普段どおりの土方さんと総悟のやり取りを横田、屯所にいても特にやることがないので私は外へと出る所とした。

「何か、することないかなあー」

ふと外を歩いてみると、見覚えのある長髪の後姿。桂さんを発見した。

「ジラアアアー!」

銀さんや神楽ちゃんが桂さんのことをジラと呼んでいたのを思い出し、私も真似をしてみた。

「ジラじゃない!桂だ!なんだいきなり……おや、お主は」

す」。こ形相で振り向かれたが、私だとわかると表情が戻った。

「アリス殿ではないか。こんな所で何をしているんだ？」

「いや、あなたこそ、指名手配犯なのに、こんな街中で堂々と歩いて何をしているんですか」

まあ、私は仕事休みなんで、ただ歩いていただけですよ。と質問の一応答えておいた。

『これは一度いいですよ、桂さん』

桂さんの横を見ると、白い生き物が文字のかかれた看板を手に持っている。

「桂さん? なんですか、この謎の生物は……」

「謎の生物じゃない、Hリザベスだ」

「え? 生物じゃないの?」

「とりあえず、エリザベスって名前なんだ。ところで、何が丁度いいんだろ?」

丁度いいって何が?と声に出すと、桂さんは右手で拳をつくり、左の手のひらにポンとのせるという動作をした。

エリザベスが桂さんの頭上に電球の絵が書いてある看板を掲げていた。

「どうしたんですか、桂さん」

「いや、実はだな。俺の通つているメイド喫茶が、今日は人手不足で困つているそうだ。一日だけでもいいから働ける若い娘を探しているそうなのだが……」

そう言つて、私のことをじいーっと見つめる桂さん。まさかとは思うけれど……

「アリス殿。暇なうば、メイド喫茶で働いてみてはどうだ?」

「いやあ、メイド喫茶はちよつと……」

「ちよつと良いかも、となーよーし、早速案内しちゃないか!俺について来い!」

無理やり私の手を引っ張る桂さん。え？私に拒否権は無いの？

「ちょ、そんなに引っ張らないでくださいー！」

すごい勢いで走る桂さん。そんなスピードで走つてたら転んじゃう、と思つた矢先に桂さんはこけた。手を繋いでいて、つられて私もこけそうになつたが、私はなんとか立つていた。

「あ、あの。大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃない、桂だ……」

私は、繋がれていない方の手を差し伸べ、桂さんを助け起こす。

「アリス殿は優しいな。なんだか、アリス殿のメイド姿を他の奴らに披露するのが惜しくなつてきた。ここでどうだ、俺だけのメイドになつてはくれないか」

「何がどうだなんですか！？もつ、変なこと言つてないでさつと行きますよ」

別に今日は特段やることはなかったので、

ちょっと抵抗はあるものの、私はメイド喫茶で働くことに決めた。そして私達はメイド喫茶に辿り着き、私は早速着替えさせられた。

フリルが多いスカートは隊服のやつよりも短いし、メイド服は可愛いけれど、恥ずかしい。

「おお、想像以上に似合っているではないか、アリス殿！俺が毎日指名しようではないかハツハツハ

「いや、働くのは今日だけですよ？」

照れくさい表情をしている私とは裏腹に、私のことを絶賛する桂さん。

エリザベスも『可愛いよ』なんて看板を横から出している。

可愛いって、服がでしょ？

こんな格好してると、知り合いには見られたくないなあ。特に真選組の皆さんとか。

お帰りなさいませ、ご主人様～という声が聞こえてきて、

どうやらお客様が来たよつた。早速、接客をしなきや、  
とそのお客様たちに田を向けると、見覚えのある黒服姿。

「ななななんでええ！？」

土方さんに総詰。ザキまでこる。なんでこなといに来てるのー？  
なんで会いたくない時に出てくるのー？

私は青い顔をして桂さんの方を見ると、桂さんは舌打ちをしていた。

「なぜ奴らがメイドキャフなんかに……リザベス、退くわ」

「え、ちょっと待つて、桂さん！」

桂さんは真選組を見るとすぐに、バイバーの言葉とともに、颯爽と  
その場から去つてしまつていた。

ていうか、キャフって、バイバーって……

近頃の攘夷志士ってそんな言葉遣いなの？それとも桂さん限定？多  
分後者だろう。

桂さん、行つちやつたし、じりじよつ……とつあえず、の人達に

見つからないようじょひ、と十方さん達に背を向けた瞬間、後ろから声をかけられる。

「セイのメイドさん、注文頼みます♪」

総悟オオ！

「じーつー隊長、俺たちは遊びに来たわけじゃないんですよ

「なんでイ、せっかくだし注文ぐりこせでへだせH。地味のくせに生意氣なやつだ」

「地味のくせて何だよオオーー?」

「ビ、ビッシュ。振り向かないのも不自然だし、でも見られたくないーなんて思っていると、私が反応しなくて痺れをきらしたのか、肩をぽんと叩かれる。

「聞いてやすか……って、アリストこんな所で何してるんですア。それにその格好」

「それはじつちの台詞ー隊服だし、仕事中なんでしょう?そつひーか

## こんな所で何してるので

もう私は、開き直ることに決めました。

「おい総悟。あんま揉め事起こすな……つて、月宮アアア！？」

謬れ出した私達の異変に気がついて、土方せんぬでもがけのひにやつてきた。

「おまつ、何してんだ、そんな格好で……」「

土方さんは咥えていたタバコを思わず落とし、驚いた表情で口をパクパクさせながらこちらを見ている。

「だーかーらあー、そつちこいを向せつてるんですか！ 仕事中じやないんですか？」

「俺達は、桂小太郎がこの店に通つてゐるとの情報があつたから、ここに来ただけだ」

あ、ちゃんと仕事だつたんだ。

「副長へ？あんまり騒いでいると、桂のやつに見つかって逃げられてしましますよ～？」

山崎が、ソファに座った体制でこちらの様子を伺ってきた。  
いや、もう桂さんはとっくに逃げているんだだけね。

山崎は私と目があつた瞬間、顔を赤くして固まってしまった。赤くな  
りたいのはこっちの方なのに、なんでザキが赤くなってるんだろう  
う。

「ところで円宮、桂のやつ見なかつたか？」

私は静かに首を横に振つた。嘘をついた罪悪感は少しはあるけれど…  
…どうせ見たといつても、

今現在の桂さんの居場所はわからないし。

あ、でも。桂さんのせいでこんな格好をしているところをこの人達  
に見られちゃつたわけで、やつぱり見たつて言つた方がよかつたか  
な？なんて後から思つ。

あー、どうにかしら、今いる場所はわからないんだから、まあいつ  
か。

……それにしても、この3人は必要以上に私のことを見つめる。

なんですか、そんなに私にメイド姿は似合わないですか？

無駄に見られて恥ずかしいので、やつやつこの人達の前から離れたい。

「すみません、そのメイドさん、このパフェタダ券使いたいんですけどー」

と思つてみると、後ろからお姫さんの方へと向かつたが、私の足は途中で離れられる理由になるー。

「はーい、ただい……まーー？」

私は振り向き、そのお姫さんの方へと向かつたが、私の足は途中でとまつた。

「銀さんんんーー？」

どうしてこうも、知つてゐる人が次から次へと。よく見ると新八君と神楽ちゃんもいて、私の大声に反応して、3人ともこちらを凝視している。

「あれ？」アリスちゃん？何してんの、こんなところで

銀さんの問いに、桂さんに誘われてここで働いていると説明しようとしだが、土方さん達の前で桂さんの名前を言つわけにもいかないので私は黙つていた。

「おい万事屋ア、こんなところに来るなんぞ、てめえらよつぱり暇なんだな」

銀さん達の存在に気づいた土方さんが、口を挟んできた。

「おやあ、土方君？てめーらにや、こんなところでサボりやがつて、税金泥棒もいとこだぜコノヤロー」

なんか、いつの間にか2人の間で火花がバチバチしている。

「おじチャイナ、ここで会つたが100年目ですゼイ。俺と決闘しろ」「ノーヤロー」

「ああん？ やんのか、望むとこう」

「いつもいつもで火花散らしながら睨みあつてるし……」

私はとりあえず、新八君に話しかけることにした。

「なんだか意外、万事屋の人達も、こうこうこうに来るんだね」

「いやあ、銀さんがこのパフュのタダ券をもらつてきたんですよ。珍しくどこか連れてつてくれたと思つたり、メイド喫茶といつのもどうかと思いますけどね」

銀さんなら、パフュを独り占めしそうなイメージがあつたけど、ちやんと新八君や神楽ちゃんも連れてくるんだ。

「それにしてもアリスさん、とても似合つてますね。メイド服」

「あら、ありがとう」

お世辞でも、可愛い服が似合つていると言われるのは、嬉しくないこともない。  
にこりと笑うと、新八君も少し頬を染めて笑い返してくれた。

なんだか癒されるなあ。……あ、新八君つてザキに雰囲気が似てるんだ。

「ぱつつあんよお、せつかく連れてきたつてのに文句があるんですか？タダ券だよタダ券。エロロジージャないの。それに何アリスちゃんと仲良くな話してんだコノヤロー」

「いや、あなたの場合はロロジーじゃなくてロロジジーですよ」

「それよりアリスちゃん。銀さんのためにパフュ持つてきて～アリストちゃんの運んできたパフュ食べたい～」

銀さんのこの言葉で思い出した。私、一応仕事中だった。なので、パフュを持つてこよみと席を立つと、総悟が喋りだした。

「待つてくだせヨ那ア。生憎、そいつは俺の言つことしか聞かないメイドなんですか？」

……はい？

「というわけでアリス。さつさとじ」主人様の靴を舐めなせエ」

そう言つて総悟が足を差し出してくるが、もつこれ、メイド喫茶でもなんでもないよね？

「それは聞き捨てならねえな沖田ぐーん。アリスちゃんは銀さんだけのメイドなんだよー？」

いや、それも違います銀さん。

「ならアリスに決めてもらいやしょ。なあアリス。旦那と俺、どつちの靴を舐めるんでイ？」

「どつちも嫌だあああ！」

ていうかなんで、靴を舐めること前提で話しが進んでるのー？

私は助けを求めるべく、山崎の元へと近寄つた。  
すると、赤い顔でぼーっとしている。

そういえば、店に入った時から、顔赤くなかったっけ……？もしかして熱もあるのかな！？

「ザキ、大丈夫？顔赤いよ、熱もあるの？」

私は山崎の隣に腰を下ろし、山崎の額に自分の左手を当てる。すると山崎はひどく慌てだした。

「えええ、アリスちゃん！？なつ、かか顔が近づ……！」

「まあ大変！さつきよりも顔が赤いじゃない！土方さあーん、ザキ熱がありますよ！」

私は山崎の額に手を当てたまま土方さんを呼んだ。

「ほおー、そいつは大変だなあ山崎イ……」

なぜだか土方さんは両手をポキポキとならしている。え、なんで？

「山崎、てめえ何してんだーーー！」

「ぎやあああー！」

なぜか土方さんは山崎をボロボロと殴りだした。  
なぜだか総悟も山崎に蹴りをいれている。

え、ちよ、病人になんてことを……と困惑の横で、  
神楽ちゃんは、男の嫉妬は醜いネ、なんて咳いている。どうこう意  
味だうう。

「おっヒ、じんなことじつる場合じやなかつた……。どうやう桂の野  
郎はいねえようだし、引き上がつた。田舎、お前も一緒に帰るネ。  
着替えてこ。」

「え、でも。まだちゃんとした仕事してない……」

「こーから卑くしろ。」

なんだかよくわからないけど、土方さんに急かされるがまま、  
私は土方さんと総悟とザキと一緒に屯所に帰る」とになった。

仕事、あんまりしてないんだけど、よかつたのかな。

なんて呟いている月富の言葉は無視し、俺達は屯所へと戻ることにした。

月富が、山崎が熱があるだと慌てていたが、

山崎に熱なんかねえことを伝えると、安心した顔に戻った。

月富が、こいつは鈍感にもほどがある。

あんなメイド姿のままこいつを、特に万事屋の前に居させたくはない

かつたから、

思わず連れて帰つてしまひまつた。

山崎はボロボロな顔でとぼとぼと俺について歩いているが、総悟は俺の顔を見て睨んでやがる。  
つたく、なんだってんだよ。

「土方をーん、その手を離しなせエ。アリスが嫌がつてんのがわからねえんですかイ？」

ああ？ 手だあ？

俺は自分の手を確認すると、月富を引っ張る形で手を繋いでいた。

店を出た時から無意識にこの状態だつたらしい。

「あ、悪い」

俺は素直に手を離す。無理に引っ張つてしまつて、痛かつただらうか。ふと月富の顔を見ると、え、あ……と言ひながらわたわたとしていて、俺と繋いでいた方の手をぼーっと眺めていた。

「土方のヤローの手も離れたし、アリス、これをつけなせエ」

そう言つて総悟は懐から鉄鎖のついた首輪をちらつかせる。

「えつ、嫌だつ！ 嫌だつて」

月富は相変わらずわたわたとしている。

「何で嫌がるんでもア」

いや、嫌がらないほうがおかしいだろ。

総悟、辞める。周りの田があんだる。と土方口ノヤローと言われ、俺は渋々首輪をしました。

なんでイ、なんで土方と手を繋ぐのよべつて、俺に繋がれるのは拒否するんでやア。

気にこじらねエ。

でも……やうこいつ態度をとられると、もつとこじめたくなりませア。

アリスは、最近土方に近づきすぎなんですかア。

この前なんか、土方の部屋なんかに花を飾りにいったらしく。

……今に見えてるイ。俺が後でたーつぶり可愛がつてやつまさア。  
だから待つてるイ、アリス。お前は俺だけのモノになれば、それでいいんでイ。

副長はアリスちゃんと手を繋いでいたし、  
隊長はアリスちゃんを鎖で繋げつけたし…… 2人とも、すげいな。  
いろいろと。

俺は、後ろからそんな様子をじつと見ていた。  
手を繋いだりとかじやなくともいいから、俺も何かアクションを起  
こさないと。

のままじや地味がさらに地味になつちやう。

せめて話しかけるだけでも。

「ア、アリスちゃん!! あのやつ……！」

勇気を振り絞つてアリスちゃんに話しかけ、次の言葉を言おうとした瞬間。

副長と隊長がものすごい形相でこちらを振り向いたと同時に、2人分の蹴りが俺にとんできた。

「うわああああーーーなんでええええーーー？」

俺は吹っ飛ばされながらこいつ思つ。やっぱり、この2人に敵つのは  
難しいのかも知れない……

今日は総悟と一緒に市中見回りの日です。ただいま、2人並んで街中を巡回中。あまりに平和な町並みに、何にも起こりそうにないね、なんて呟いて見る。

「そう次々と何か起こったら、真選組だけじゃ対処できねーじゃねえか。何にもないのが一番でさア」

最もなことを言つてくる総悟。でも、その何かを起こしているのが、総悟の確立が高いのは氣のせいなのでしょうか？

何かあつたらすぐにバズーカがぶつ放したりとか。  
……でも、やる時はやるんだよね、この人。

「何もないことを確認するのも俺たちの仕事でイ。それに、こうして見回つてゐるからこそ何も起きないかもしれないし、いざ何かあつた時にはすぐに対処できるじやねーか」

総悟が珍しくまともなことを……やつぱり、真選組一番隊隊長なだけはあるな。

私も、副隊長として総悟のことと見習わなきや。

「……って総悟おお？そんなアイマスクついたら、何かあつても  
すぐに対処できないうからつーーー！」

わー、頑張つぞーとやる気のないう声で言にながりベンチに横たわり  
アイマスクを装着してこる総悟。

言つてることとせつてることが違うーー向を頑張るのへ少なくとも見  
回りではないよね、これ。

私は軽くため息をつき、横になつている総悟のことを見つめる。  
アイマスクで田は見えないが、口を少しあけて、規則正しい呼吸音  
をたてながら眠つてこる。

てこつか、寝るの早いな。手を胸の下で指を絡ませて交差させてお  
り、  
そのポーズがなんだか可愛らしい。

「サダメ子でも、可愛いことあるんだね

起きてる時に、可愛いなんて言つたら何をされるかわからなくて怖く  
て言えないが、

私は眠つている総悟にさつと弦ついた。

「わーい、土方さんが切腹したぞー、わーいわーい、ムニャムニャ  
…………」

いや、これほんとに寝てるの？なんだか寝てるんだか寝ていらない  
だか怪しげに寝言を発している。

「ムニャムニャ、アリスがついに俺に服従しやしたか、それで、何縛  
りがいいですかねイ…………」

どんな夢見てるのあお！？

総悟は夢の中だし、どうしたものかなーなんて考えていふと、どう  
からか、なんとも香氣な喋り方で

「ナニのキレイなお姉ちゃん、ちよつとすまとのー」

と、声をかけられた。

ふとその人の方へ視線を向けると、もじやもじや頭に、サングラス  
の顔が目に入る。

口元は愉快そうに大きく開かれている。

なんだか、もしや、ナンパ？

「この辺に、万事屋金ちゃんといつ店はあつませんかの？道に迷つちやつたきに～アッハッハ

あ、道に迷つてゐるのか。道案内も立派な仕事だよね、教えなきや。  
……それにしても、道に迷つたつてわりには、笑つてゐるよこの人。

「それなら、私知つてますよ。案内しますねー。」

あれ？よく尋ねたら金ちゃんじやなくて銀ちゃんだよね？

まあ、いつか。

「おお～案内してくれるだか、江戸っ子は親切じやの～！いやあ～  
しかし、姉ちゃんはなかなか魅力的ぜよ。わしどこから遊ばんね  
ー？」

「No Thank youです。ていうか、万事屋に行くじやなかつ  
たんですか？」

「おお～やつじゅつたきに、アッハッハ。わあこくぜよー。」

やつからこの人は、私が話しかけてもいのに次々と話題をふつてくれる。

そして何がおかしいのか常にアッハッハと笑っている。

名前を聞かれたので、答えておき、一応この人の名前も聞いておいた。

「どうやら坂本辰馬さんといつ名前らしい。」

そんな感じで坂本さんと万事屋に向かつて歩いていると、何やら怪しい男の人たちが私を囲んでいた。

「そここの女、真選組隊士とお見受けする」

「真選組隊士が一人で、しかも女ときた。お前さんには恨みはないが、ちことばかし痛い目にあつてもらうか」

はあ……またか。隊服を着て見回つてみると、じつして襲われることは少なくはない。

坂本さん、少し下がつていてください。  
一般人を巻き込むわけにはいかないので、私はこいつ声をかけ、抜刀しようと手をかけた。

争い」とは好きじゃないけど、真選組隊士が「こんな甘口」とも云つてられないんだよね。  
わい、殺さない程度にやるとこまですか……

「おまんざり、こんな大勢でおなじを襲つたあ、感心しないき」

下がつてくだわい、と云つたはずなのに坂本さんは私の横から動いていなかつた。

よく見れば、懐から銃を取り出しこる。

「ああ？ なんだお前は！？」

すると、坂本さんは二つの間にか男の横について、銃をつまつけていた。

その瞬時の速さに男はもぢりん、私も驚いた。

「おとなしく帰るなり、いつも手を出さんぞよ」

坂本さんのサングラスが少しずれていて、なにかとても強い意思をもつよつた瞳がちらりと見えた。

男達は何かを悟つたのか、小さく悲鳴をあげ、散り散りに去つていった。

さつきまで私と会話をしていた坂本さんからは、  
へラへラしていて、ただの能天気な樂天家な印象しか受け取ること  
ができなかつた。

この短時間で、この人のことをそんな風に思つ私は少し失礼かもし  
れないけれど。

でも、この人。すごい。

戦いをせずに、敵を追い払つた。

……でも、真選組の私としては、今の連中が攘夷志士だったのなら、  
捕まえなきや駄目だつたのでは……

「わしは無駄な戦いは好かんきに、勝つても負けても得にはならん」

……一

この人、私と同じ考え方をしている。私も、そういう風に思っていた。

無駄な争いは好きじゃない、昔から。

……ん?

昔から?昔つて、いつ?

助けてもらわなくともどうにかなったのは事実だが、一応感謝の意を込めお礼の言葉を告げる。

「気にするんじゃないぜよ、アハハハハハ

と相変わらず陽気に笑っていたが、

私は少しだけ坂本さんのことを見直した。

そして、万事屋の前に辿り着いた。

「や、着きましたよ」

「おお~辿り着いたのもアイスのおかげだし、礼ば言ひせよ

アイス?もしかして、アリスをアイスと間違えているのか?

……やっぱり、さっきの見直したという気持ちは撤回をせてもうつ

といふ。

とつあえず、せつかくここまで来たので、私もつこでに万事屋にお邪魔することある。

「銀さん！」

私はそう言いながら、玄関のチャイムを鳴らす。  
しかし、何度も鳴らしても人が出でこない。

「今日はいないのかなあ」

私があきらめて、戸の前から身を引いた時、次はわしが押すぜよ、  
と坂本さんが扉の前に立つた。

いや、何度も押しても同じだと思つんだけどな。

そんなことを考へてみると、ドタドタといつ足音が聞こえてきたと  
思つたら、次の瞬間。

扉は中にいる銀さんによつて蹴り倒された。

「つだーーーしつけえんだよーー家賃ならまだ払えないって言つてん

だろーが！！」

私は戸から離れていたからなんともなかつたものの、蹴り倒された扉は坂本さんに直撃した。

「…………って？アリスちゃん？」

「あはは、銀さん。」んにちは～

銀さんは私の存在に気がついたが、坂本さんが下敷きになつてているといつなんとも言えない状況だったので、私は苦笑いで挨拶をしておいた。

「なんだ」アリスちゃんだったのか、まあ上がれよ

どんだけ家賃を滞納しているんだろう、この人は。と思いつつも、お邪魔することにする。

「あ、金時い～わ、わしもいるぜよ～……」

今の声で銀さんは、坂本さんの存在に気づいたはずなのに、ちらりと視線を向けるだけで何の反応もしなかつた。

「金時いー」

「だーかーらあーー俺の名前は金時じやなくつて銀時だつのーー! 何度言えばわかんだよー? つーかなんでお前がここにいんのー?」

銀さんは倒れたままの坂本さんをげしげしごと蹴り出した。

「久しぶりの再会だといつのつれないのでよ、共に攘夷戦争を切り抜けてきた仲間じゃないか、金時いー」

「んな事言つなら、その呼び方辞めろー仲間の名前ぐらーちゃんと呼べー!」

……攘夷戦争つて何だらう?

……でも、攘夷戦争つて。

なんか聞いたことがあるな。真選組の屯所とかかな? 土方さんとか、攘夷浪士のやつらがどうのつて口にしてるし。あ、桂さんも。攘夷活動してるつて言つてた。桂さんから聞いたのかな?

まあ、いいや。銀さんの蹴りから解放され、

やつと立ち上がった坂本さんと一緒に万事屋の中へとお邪魔する。すると、新八君が出迎えてくれた。

「アリスちゃんに、坂本さんじゃないですか。今から一度、お腹<sup>はら</sup>に飯を作るところだったんですよ。よければ食べていきませんか？」

やつに言われるとお腹<sup>はら</sup>が空<sup>から</sup>いてきたので、お煎葉<sup>せんよう</sup>に餅<sup>もち</sup>を貰<sup>う</sup>ふることにする。

「あのなあ、ぱつつあん。アリスちゃんはともかく、こんなモモ<sup>モモ</sup>に飯食<sup>く</sup>わせる必要はないだろーがよ」

「銀さん、」んな頭カラの人でも、せつかく来てくれたんですから。そんなん」と言<sup>つ</sup>っちゃダメですよ。」くらこんな頭カラな人でも……」

「アッハッハ、泣<sup>いて</sup>いい？」

ちなみに今からカレーを作ります、カレーなら多めに作れるので一度よかつたです。

なんて新八君が言つので、私も手伝<sup>つ</sup>ついた。

「玉ねぎは、キッネ色になるまで炒めてくださいね」

「ねえ、新八君。キッネ色つて、本物のほりへ、それとも写真とかの色つ？」

「いや、それひとつとも色回じですよね」

楽しく会話をしながら私は新八君とカレー作りをした。

「なんだか、申し訳ないです。ほとんどアリスさんを作らせてしましましたね……しかし、この前は姉上並みの料理を出してきたものですから、てっきりアリスさんは料理下手なのかと思つてましたよ

なので手際がよくてびっくりしました。あ、この前のクッキーは絶品でしたよーなんて言つてくる。

「この前のは、たまたま失敗しちゃつただけだよ。いつもあんなに、黒口げのもの作つちやうわけじゃないんだからね」

「ですよね、アリスさんは姉上じやないですもんね……」

ああ、姉上の卵焼きを思い出すと吐き飯がしてきた、なんて言つて口元を押されている新八君。

お妙さんは、それほどまでに料理が下手なのだろうか。

「おい新ハイ！私いい加減、肉の入ったカレーが恋しいアルコ……  
これだから新ハは……」

「もう神楽ちゃん！文句があるなら食べなくてもいいんだよ。それ  
に、このカレーは、ほとんどアリスさんが作ってくれたんだからね  
」

「あやつほーい！アリスの作ったカレーは例え肉なんか入ってな  
くても超絶品ね！アリスありがとネー！」

私が作ったと聞くや否や、すぐさま態度を変えた神楽ちゃん。

「神楽ちゃん。何この僕とアリスさんとの態度の違には……」

「うむむむ黙れヨ、コンタクト」

「メガネだアア……」

「おじお前ら、食事位黙つて食えないのかコノヤロー」

「いいじゃないか金時、わしはこいつやつて皆で騒いで食べる飯は楽しくてしゃーない、アッハッハ」

「お前には一生黙つてもらいたいんだがな。俺は銀時だつーの」

そんな感じで、5人で楽しく食事の時間を過ごした。

食後は、しばらく5人でのんびりとした時間を過ごした。

坂本さんの話しが興味深かつたので、私は真剣に聞いていたが、他の3人は、主に己の欲求のみを語っている坂本さんに呆れているのか、見事にスルーしている。

坂本さんはそんなことは気にもせずに相変わらず笑っていた。

坂本さんは、大富豪の息子で、現在は星間貿易業『快援隊』を営みながら、

気ままに大宇宙を渡り歩いているらしい。

桂さんとも知り合いらしく、桂さんにエリザベスを送ったのはどうやら坂本さんとのこと。

争いよりも商いで人を豊かにしようと考えており、利益をもたらす事で天人と地球人の調和を図る事こそが自分が国を守る手段であると考えている、と坂本さんは私に話してくれた。

その思想は素晴らしいと素直に思い、地球外に出たことのない私にとっては、特に宇宙での話しがとても面白く、私は時々銀さんの突込みが入りつつある坂本さんの話しにすっかり聞き惚れていた。ふと窓の外を見ると、夕日が沈みかけていた。面白い話しが聞いている時間が過ぎるのは早く感じるんだな。……神楽ちゃんは寝ちゃつてたけど。

「金時～これから飲みに行くぜよ！久しぶりに杯を交わし合おうじやないかアッハッハ！おまんらも着いて来い、奢るぜよ！」

そう言って坂本さんは私と新ハ君と神楽ちゃんを指差す。眠つていたはずの神楽ちゃんが

「タダ飯一キヤツホーい！」

と言にながら起き上がつた。

とこつわけで私達は、外へと出ることになつた。

「勘定は陸奥につけとくけー、がんがん飲むぜよー。」

「……と言つても、僕は未成年なんですけどね」

お酒は嫌いではないので、遠慮せずに飲むことにした。飲める時に飲まないとねー

「アリ」のお姉ちゃん、わしと遊ばんねー？」

坂本さんはさつきからお店のキレイなお姉さんに声をかけては、その度に「No tank you」と断られている。

坂本さんって、女好きなんだなあ。そんな坂本さんに銀さんは突っ込みを入れ、

新八君はその光景を慣れたように見ていて、神楽ちゃんにいたつては料理に夢中だった。

私はお酒は少量で辞めておいたが、銀さんも坂本さんも浴びるように飲んでいた。

そんなに飲んで……大丈夫かな、2人とも。

その結果。

帰り道、銀さんも坂本さんもすっかり酔いつぶれていた。

そんな2人をしおうがないな、といった感じで支えている新八君と

神楽ちゃん。

すると、前方から声がした。

「まつたく、こんなことにいちゃつたのか。世話が焼けるのう」

その人の方へ視線を向けると、無表情だが美人なオーラが漂う、女人が立っていた。

「おお～陸奥じゃなかか！アッハッハ……おえ」

「何しちゃるんじやー！」

「ひつや参ったの～わしはもう少しアイスといたいが～」

「何言つちよるんじやー！」

ああ、この人が。さつき坂本さんが話してくれた陸奥さんか。どうやら坂本さんは陸奥さんには頭が上がらないよつで、襟元を掴まれてずるずると引きずられていった。

「アイス～わしはアイスの～ことが気に入つたぜよ～ー！好きになつてしまんじや、また会

坂本さんが大声で何かを喋っていたが、陸奥さんに「げんこつをお見舞いされ、大人しく引きずられていった。

あたりは、すっかりと暗くなっていた。私もそろそろ屯所に帰らなきや。私は、銀さん、新八君、神楽ちゃんに一言いつて、帰ることにした。……銀さんはなんだかぐつたりしていて、意識がない様子だつたけど、大丈夫かな？2人がついているからいいのかな。

坂本さん、なんだかんだで面白い人だつたな。

次に会える時はいつかな？なんて思いながら歩みを進める。

…… それでも私、何かを忘れているような？

私は無事屯所に戻り、部屋でのんびりとしていた。  
さつき飲んだお酒のせいか、まだ頬がほんのりと赤い。

すると突然、襖がすごい勢いで開いて、  
驚いてそちらに目を向けると何やら物凄いオーラをまとった人物が

2人立っていた。

「ひ、土方さんに、総悟? ビリしたんですか、いつたい」

「ビリしたんですか、だあ? 仕事をぼつて酒飲んで帰つてくるたあ……お前えもずいぶんと偉くなつたもんだなあ、月宮。ああん?」

「おいアリス。寝てる俺を放置プレイたあ、いい度胸してるじゃねーかイ。アリスは俺に何プレイをされたいんですかイ?」

「え、あ……」

「そういえば総悟と仕事中だつたの、すっかり忘れてたー! ヤバイ、今、冷や汗がものすごくだらだらと流れている。

「あの~……」「めんなさい?」

2人の人物を見上げるため、自然と上田遣いになりながら一応謝つてみる。自分が座っているぶん、相手がいつもよりも高く見えるため、よけいに迫力があるように感じじる。

「「」あんですんだり……」

「真選組はいらないんですかア……」

「やああああああーほんとうめんなやう……つにやあーーー！」

私は2人からお仕置きをくらいました、とれ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9002y/>

---

真選組にて咲く花は

2011年11月27日14時46分発行